

仏領におけるユルバニスムの萌芽と興隆

ー西アジア都市の位置づけー

三田村 哲哉
社会環境部門

Germination and Rise of the Urbanisme in French Colonies Positioning of the West Asian Cities

Tetsuya MITAMURA

School of Human Science and Environment,
University of Hyogo,
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan

Abstract:

This paper made clear the following points through an analysis on the origin of "urbanisme" in the French colonies, on the master plan for new towns drawn by Hubert Lyautey, Marshal of France, on the subjects of the "Congrès international de l'urbanisme aux colonies et dans les pays de latitude intertropicale" held at the International Colonial Exhibition in Paris 1931, and on the general report of this Congrès edited by Jean Royer, town planner.

The French architects, landscape architects, and surveyor technicians who belonged to the Musée Social, and who established the Société Française d'Urbanistes, changed places with engineers, surveyors, and civil engineers of the French army in order to construct new towns were considered to be based on the theory of urbanism scientifically in the French colonies and in the countries of intertropical latitude. The top French town planners, Henri Prost, Alfred Agache, Léon Jaussely, and René Danger, especially, designed new towns in West Asian cities such as Izmir, Istanbul, Ankara, and Beirut in 1920s and 1930s.

Keywords: Congrès international de l'urbanisme aux colonies et dans les pays de latitude intertropicale,

Musée Social, Hubert Lyautey, Henri Prost, Jean Royer,

序

ミュゼ・ソシアル¹⁾ (Musée Social) は 1908 年 1 月 14 日に政治家、学者、弁護士、建築家ら、およそ 100 名からなる都市・農村衛生部会²⁾ (Section d'hygiène urbaine et rurale) を創設し、1894 年に低廉住宅に関する法律³⁾ の制定に尽力し、部会長を務めた政治家ジュール・シグフリード (Jules SIEGFRIED: 1837-1922)、建築家で副部会長のルイ・ボニエ⁴⁾ (Louis BONNIER: 1856-1946)、建築家・都市計画家で主席書記官のアンリ・プロスト⁵⁾ (Henri PROST: 1874-1959) の下に 18 名の建築家、風景画家、造園家らが集まった⁶⁾。プロストらは 1911 年に、ミュゼ・ソシアル総裁で実業家のジョルジュ・リスラー⁷⁾ (Georges RISLER: 1853-1941) 主導の下で、1919 年にフランス都市計画家協会 (Société Française des Urbanistes) となるフランス建築家・都市計画家協会 (Société Française des Architectes Urbanistes) を 1911 年

に設立し、1919 年 3 月 14 日に制定⁸⁾、1924 年 7 月 19 日に改正⁹⁾ された同国で最初の都市計画法、コルニュデ法 (La Loi Cornudet) の制定に尽力するとともに、前世紀までの技芸 (Art) よりもむしろ科学 (Science) に基づく新たな都市計画、ユルバニスム (Urbanisme) を掲げて、高等教育機関の設立や雑誌「ユルバニスム Urbanisme」の創刊、国際会議や展覧会の開催とともに、20 世紀前半のフランスの国内外でその波及に努めた。コルニュデ法は、人口が 10,000 人以上の地方自治体を対象に、占領地はか一部の除外地域を除いて、国内のみならず植民地や海外領土でも施行されたため、本国では第一次大戦で被災した都市の復興に貢献するとともに、アフリカから極東、オセアニアまでの植民地や保護領の都市計画や開発計画を後押しした。国内におけるユルバニスムの萌芽と、その後の国内外における展開の概略はすでに指摘した通りである¹⁰⁾。

フランスの植民地に関する研究の蓄積は非常に厚く、シャルル＝ロベール・アジュロン¹¹⁾や平野千果子¹²⁾らによるものがあるが、研究の視点は都市計画には至っていない。フランス植民地を中心としたユルバニズムに関する研究は歴史学や地理学に始まり、その全体像を捉えたものにヴェンドリン・ライト¹³⁾やポール・ラビノー¹⁴⁾、ヴァンサン・ベルドゥレ¹⁵⁾による著作がある。都市史にはジャン＝リュック・ピノル¹⁶⁾や布野修司¹⁷⁾の著作にまとめられているが、いずれもミュゼ・ソシアルとユルバニズムの一部を言及するにとどまっている。またこうした主題に関する研究は地域、国、都市の単位で実施されており、その全容の把握に努めたもの、あるいはミュゼ・ソシアルを踏まえて、仏領におけるユルバニズムの概況に言及したものは稀有である¹⁸⁾。

本稿は、こうした研究状況を鑑み、フランス語圏ブラックアフリカとユベール・リョテ (Hubert LYAUTEY: 1854-1934) に言及することにより、仏領における都市計画の萌芽を捉えつつ、ミュゼ・ソシアルの都市・農村衛生部会に所属する、もしくは本部会において事業報告を行った建築家、都市計画家、造園家、測量士らの作品暦、および 1931 年パリ植民地国際博覧会 (Exposition coloniale internationale de Paris 1931) で開かれた国際会議とその報告書の内容を照合することにより、植民地帝国絶頂期の概略を捉え直した上で、西アジア都市においてユルバニズムの波及に尽力したフランスの都市計画家を捉え直したものである。

1. 植民地の開発計画—フランス語圏ブラックアフリカの 1 例—

Urbanisme(ユルバニズム)は、1904 年にスペインの都市計画家、土木技師、政治家イルデフォンソ・セルダ¹⁹⁾ (Ildefonso CERDÁ: 1815-1976) による格子状の街区案 (1859) を継承した、おそらく最初の実践者で主にフランス国内の都市計画を手がけた建築家で都市計画家のレオン・ジョスリー²⁰⁾ (Léon JAUSSELY: 1875-1932) が、ローマのフランス・アカデミーから帰国した後、母国に伝えたスペイン語 Urbanización (ユルバニザシオン) に基づいていると言ってよい。国内におけるその実態は、パリ城壁に対する視点が軍事から衛生に転換された後、ミュゼ・ソシアルの建築家、都市計画家、造園家、測量士のうち、特に建築家・都市計画家ウジェーヌ・エナール²¹⁾ (Eugène HÉNARD: 1849-1923) と造園家・都市計画家ジャン＝クロード＝ニコラ・フォレストイエ²²⁾ (Jean-Claude-Nicolas FORESTIER: 1861-1930) が、当時はまだ若手筆頭の建築家であったプロストと建築家で都市計画家のアルフレッド・アガシュ (Alfred

AGACHE: 1875-1959) とともに示したその開発計画にはじまる²³⁾。

こうしたユルバニズムにつながる動向は、前世紀の仏領における都市開発に見られる。当時の有力なフランス植民地の 1 つ、フランス語圏ブラックアフリカでは、18 世紀末から第一次大戦まで総督の下に置かれた工兵や測量、土木 (Service des travaux publics) が主体となり、都市の開発を担っていた²⁴⁾。1782 年、ポルトガルとオランダによって要塞島となったセネガルのゴレ島の開発計画を描いたのは、地方総督の下に置かれた工兵と土木 (Service des Ponts et Chaussées) で、こうした開発事業はこの間に大きく発展した。そのなかでもサン＝ルイ (1828、1919)、特にその郊外地ソール・サン＝ルイ (1837) やボワント・ノール＝サン＝ルイ (1843) (図 1)、ダカル (1862、1915) (図 2)、ティエス (1885) で次々に計画案の描かれたセネガルと、グラン＝バッサム (1890)、アビジャン (1897)、バンジェヴィル (1899)、グラン・ラウ (1904)、ダロア (1905)、ディムボクロ (1909)、オディエンネ (1911) で計画されたコート・ジボワールに集中している。またオボク (1885) のジブチ、カメルーン、ベナン、マリ、ギニア、ニジェール、トーゴの諸都市でも同様の案が描かれており、その範囲はおおよそ全域に及ぶ。これらの計画案は植民地政策に基づいた安定統治を第一の目的として、地区、整地、港湾、鉄道、市街地、首都、行政区、居住地を、拡張 (extension)、再編 (realignment)、配置 (alignement)、占領 (occupation)、入植 (implantation)、基礎 (fondation)、開発 (aménagement)、発展 (développement) させる、あるいはすることによって、もしくは地域毎にこれらの手法を組み合わせることによって新たに獲得した入植地に都市を描き出したものである。これらの案の中には、工兵や司令官の名が記されたものもごく一部に含まれているが、ほぼすべて総督ほかの統治者の下で描かれたものであることに変わりない。すなわち宗主国が従属国の都市に描いた都市の絵図がこうした形で生み出されたのである。

開発計画そのものは、それぞれ都市毎に異なるが、いくつかの共通点が存在する。まず 1 つは、元はポルトガルの要塞島にはじまるゴレ島を除くと、サン＝ルイほかのセネガルの諸都市に描かれたものはいずれもまさに格子状の街区で、フランス本国で新たな都市計画、ユルバニズムが波及しはじめる第一次大戦後のサン＝ルイ (1919) でもこうした街区に変わらなかった。コート・ジボワールでも同様に、港湾の整備に注力したアビジャンを除くと、ほとんどの都市で格子状の街区が描かれた。

一方、こうした街区とは異なる形の都市も現れた。その1つが放射状の街区の採用されたコート・ジボワールのグラン・バッサムやマリのバマコ（1894, 1906）である。またベナンのコトヌ（1893）ではその提唱者とされるエナールよりも先に円形の交差点が描かれ、それを中心とした街区が形成された。これらはいずれも19世紀末から20世紀初頭に計画されたものである。

さらに、より一層広大な範囲を対象にした都市計画は20世紀に入ってから顕著に描かれた。第一次大戦以前に限ると、東西方向に目貫通りを設けたコート・ジボワールのオディエンネ（1911）や、中央市場を中心とした円形都市、カメルーンのニュー・ベル・ドゥアラ（1913）（図3）やトーゴのロメ（1914）（図4）がこうした一群に該当する。これらの都市はモロッコ初代総督となるリヨテ²⁵⁾の基本方針、モロッコ人と欧州人の居住地域をそれぞれ別に設けることを意図した分離政策に基づき、プロストがモロッコのカサブランカ（1913-23）やマラケシュ（1914-24）、ラバト（1916-24）ほか全15都市で都市計画を描きはじめるほぼ直前に描かれたもので、こうした広い範囲を対象とし、前世紀のものとは明らかに異なる都市計画の提案は、プロストがモロッコに従事する以前から存在していたことになる²⁶⁾。

つまりフランスは、こうした従属国で蓄積した従前の開発実績とその技術を有しており、20世紀初頭に萌芽を迎える新たな都市計画、ユルバニズムの土台となるようなものを形成していたのである。その中心人物が、モロッコ諸都市の都市計画やヴァール県コート・ダジュールの保全・開発計画²⁷⁾ばかりでなく、西アジア都市の都市事業、イズミル大火後の都市復興²⁸⁾やコンスタンティノーブル（現・イスタンブール）の都市整備²⁹⁾、これらすべての事業がミュゼ・ソシアルの都市・農村衛生部会で中心的な役割を果たし、コルニュデ法の制定やフランス都市計画家協会の創設に尽力した若手随一の建築家・都市計画家プロストに委ねられるように差配したリヨテである。

2. リヨテの都市計画

建築家ジュール＝アルドゥアン・マンサール（Jules HARDOUIN-MANSART: 1646-1708）が建造した廃兵院、すなわちアンヴァリッド（1676）はフランスの偉大な軍人たちが眠る霊廟となる。そのクーポラの真下、皇帝ナポレオン・ボナパルト（Napoléon I^{er} 在位：1804-1814, 1815）の廟を中心に、エグロンの愛称をもつローマ王、子息で皇帝となるナポレオン2世（Napoléon II 在位：1815）、そして南東に兄ジョゼ

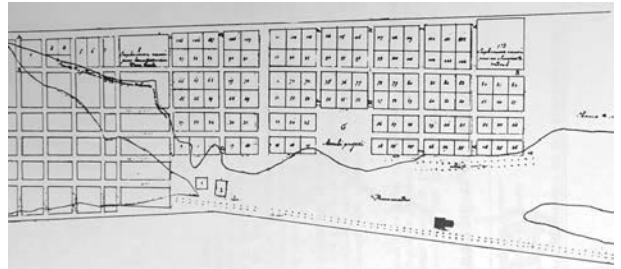


図1 ポワント・ノール＝サン＝ルイ（1843）

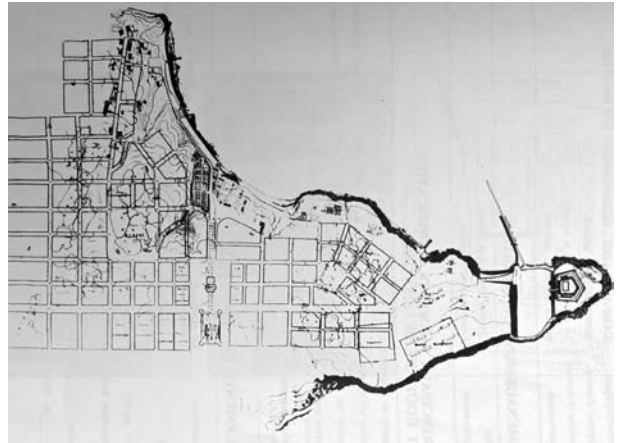


図2 ダカル（1862）



図3 ニュー・ベル・ドゥアラ（1913）

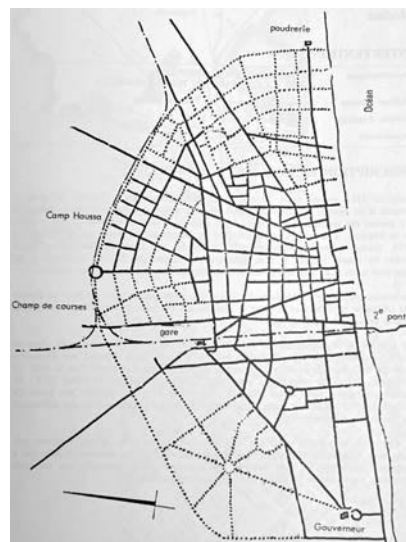


図4 ロメ（1914）

フ (Joseph BONAPARTE: 1768-1844)、南西に弟ジェローム (Jérôme BONAPARTE: 1784-1860)、東西それぞれにルイ 14 世期の偉人、要塞築城の名手ヴォーバン (Sébastien Le Prestre, Seigneur de Vauban: 1633-1707) と指揮官の理想像テュレンヌ将軍 (Henri de la Tour d'Auvergne, Vicomte de Turenne: 1611-75)、北端部に皇帝の側近ジェラルド・デュロック (Gérard DUROC: 1772-1813) とアンリ＝ガディアン・ベルトラン (Henri-Gatien BERTRAND: 1773-1844) が眠る。その間、第一次大戦で連合軍を勝利に導いた元帥フェルディナン・フォシュ (Ferdinand FOCH: 1851-1929) と南北軸を基準に対称となる位置に眠るのが、フランスが 1534 年、カナダに到達して以来、南米、カリブ諸島、アフリカ、ニューカレドニア、インドシナに入植し、領土が史上最大となったフランス植民地帝国の絶頂期の国家企画、1931 年パリ植民地国際博覧会の最高責任者、元帥リヨテである³⁰⁾。

リヨテはプロストにモロッコ全 15 都市の都市計画³¹⁾を委ねる以前に、自らがフランス領マダガスカルで初期のフランス語圏ブラックアフリカに見たものとは異なる新たな都市を描いている。この若き軍人は 1892 年から 1896 年まで、後にフランス軍総司令官となるジョゼフ・ガリエニ (Joseph GALLIÉNI: 1849-1916) とインドシナのトンキン (現・ハノイ) に派遣された後、1896 年 9 月 15 日にマダガスカル総督となったガリエニを追い、1897 年 3 月 7 日に首都アンタナナリボに、同年 4 月 8 日に首都の北に位置する郊外地アンカソベに移り、1900 年から 1902 年まで工兵や測量、土木に代わって建築家あるいは技術者として住宅、道路、橋を組み合わせた新たな都市を建設した³²⁾。さらにリヨテはアンカソベに続いて、南の首都、マダガスカル中央高原に位置する標高 1,200 m の都市フィアナランツォアをマダガスカル有数の都市に発展させる契機をもたらした。後世に「建設者 Bâtitteur」や「都市計画家 Urbaniste」など、別称が残されたのは、単に自らが委ねたプロストによるモロッコの都市計画が成功したことに加えて、そもそも自らが実践者として新たな都市を描き、それを実現させるという事業を展開していたからにほかならない³³⁾。

リヨテは「・・・・・・アンカソベの事業で天性の都市計画家となったのだ³⁴⁾。」というように、工兵や測量、土木が描いていた格子状の計画案とはまったく異なる形の都市像を提案した。東側から西側まで円を描くように囲まれた非常に小さな集落は、元は水田で、その北側にもう 1 つ小さな集落アビ＝ピハオナナ (A^bpihaonana) が寄り添うようにつながっており、中央を南北に貫く道

がこれら 2 つの集落をつないでいる。さらにその北側と西側にはそれぞれ遺跡とアヒ＝トロニ (A^htrony) という集落の廃墟がひっそりと残っていた (図 5)。

リヨテは「・・・・・・この土地をアンカソベという小さな町にすることに『建国』の喜びがある。私自身が土地の上に図面を引いて、家や大通り、樹木を、父親のような気持ちで生み出したのだ。・・・・・・³⁵⁾」と記したように、北西から南東にかけて目貫通りを通して、南のアンカソベとアビ＝ピハオナナにかけてそれらの周囲を耕作地で囲い込み、それぞれの要所に円形交差点を配置しながら街区を形成、さらに北西端から南東端にかけて武器庫、留置所、労働者住宅、市場、学校、裁判所、邸宅 (総督府)、石工場、食糧供給地、官邸、苗床、救急病院、民兵所、菜園を各街区に配分していった (図 6)。ここにまさに後のゾーニングという形で顕在化するようになる都市計画の課題に対して、1 つの明確な回答を示唆したかのような案が描かれており、こうした観点に格子状に街区を形成した従来の工兵らによる案とは明らかにまったく異なる、新たな都市計画ユルバニスムの萌芽を見出すことができる。

アンカソベとアビ＝ピハオナナに描かれた案は、それら両者の集落を破壊する近代主義の都市計画であったことは間違いない (図 7)。その一方、これとはまったく正反対の歴史主義に基づいた側面が北西の端部にある。都市は、北側に十分に拡張が可能であったが、その区域は遺跡と廃墟の南側で明確に区切られており、これら両者を破壊することなく、2 つの集落の上に新たな都市が描かれたという点にほかならない。リヨテは相反する両者の手法を組み合わせる開発計画を実施したのである。すなわちアンカソベとフィアナランツォアは、プロストが手掛けたモロッコの全 15 都市の前段階に位置する都市計画を実現させた、まさに「リヨテヴィル Lyauteyville」であり、いわゆる分離政策という基本方針を都市計画に反映する前段階の近代主義と歴史主義の両者に基づく原案を示したものである (図 8)。

3. 国際植民地・熱帯諸国都市計画会議

1931 年パリ植民地国際博覧会は、5 月 6 日から 11 月 15 日までパリの東側に位置するヴァンセンヌの森を中心に開催された。その終盤にあたる 10 月 10 日から 15 日までの 6 日間にリヨテ、プロスト、第二次大戦後の戦災復興に尽力することになるプロストの弟子、都市計画家のジャン・ロイエ³⁶⁾ (Jean ROYER: 1903-81) が中心となり開催したのが、植民地と熱帯諸国における新たな都市計画、ユルバニスムを掲げ

た国際植民地・熱帯諸国都市計画会議³⁷⁾ (Le Congrès international de l'urbanisme aux colonies et dans les pays de latitude intertropicale) である。その目的は「風俗や習慣の異なる人種が暮らす都市の最も良い配置を定義すること³⁸⁾」と定められていた。このうち「配置」はそれぞれ異なる用途の建築あるいは交通網の体系化、広場や公園などの都市空間の整備を割り当てることを意味しており、フランス人がこれから永続的に続くことを確信した世界に点在する仏領において、自らとは歴史や文化、宗教、風習がまったく異なる人間とともに営むための都市像の理想を求めていたのである。そのため、プロストが掲げた検討課題は「居住の定義」「通風の研究」「都市と居住地の衛生」「都市美」「新たな建設業者と地元の職人の協働」「プランテーションと公衆衛生」「古代都市の観光と保全」「歴史的な景観と記念建造物の保護」のように実に多岐に渡っていた。

この国際会議の主題は、世界各地に点在する植民地および熱帯諸国における都市計画に関する報告「Ⅰ．植民都市と熱帯都市の開発」、および古代都市を主題とした「Ⅱ．美学の課題」に、「Ⅲ．居住」「Ⅳ．保健・衛生」「Ⅴ．都市と地方の法律」「Ⅵ．都市の具体案の実行性」という、プロストが言うさまざまな観点からの考察が付加される形にまとめられた³⁹⁾。各地の実情に関する「Ⅰ．植民都市と熱帯都市の開発」は、仏領のある世界各地を「a) 北アフリカ」「b) 中央アフリカ・マダガスカル」「c) アメリカ」「d) 東洋」「e) 極東⁴⁰⁾」という全5地域に大別して体系的にまとめられており、「Ⅱ．美学の課題」の主題である古代遺跡に、歴史主義を尊重する植民地政策の方針が垣間見られる。さらに、この世界の地域区分は、当時、仏領がほぼ全世界に広がっていること、建築家、都市計画家、造園家、測量士らがこれらの地域で都市計画を検討したことを示唆する何よりの証拠であり、ここで注目すべきはそれぞれの地域で活躍した立役者にほかならない。

会議は議長 (Président) と報告者 (Rapport général) によって運営された。まず「a) 北アフリカ」の場合は、それぞれ法律家マルセル・オリヴィエ⁴¹⁾ (Marcel OLIVIER: 1879-1945) と、プロストとともに提案に関わった作家で経済学者のギョーム・ド・タルド⁴²⁾ (Guillaume de TARDE: 1885-1989)、「b) 中央アフリカ・マダガスカル」の場合、記者アンドレ・メナブレア (André MÉNABRÉA: 1872-1960) とル・コロネル・ヴィタス中尉 (le Colonel Weithas: 1875-1966)、「c) アメリカ」の場合、メナブレアと建築家・都市計画家ジャック＝アンリ・ランベール⁴³⁾ (Jacques-Henri LAMBERT:

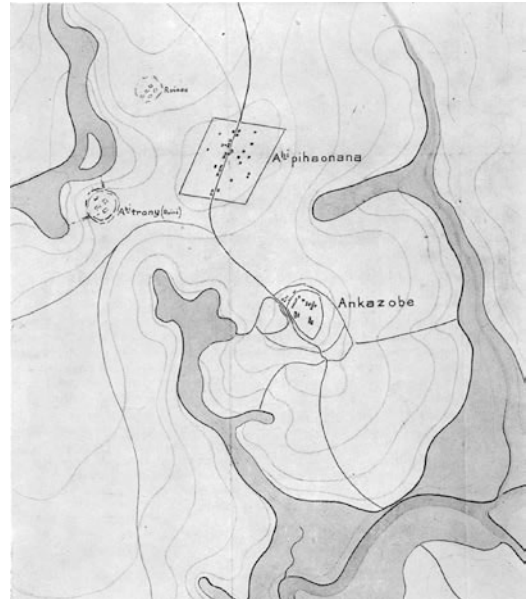


図5 アンカソベ (下) とアビ＝ビハオナナ (上)、計画前

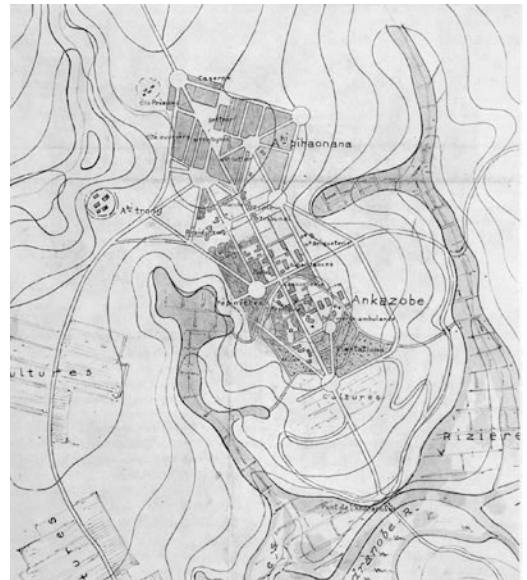


図6 アンカソベ (下) とアビ＝ビハオナナ (上)、計画後



図7 アンカソベの大通り



図8 アンカソベの遠景

1884-1961)、「d」東洋」の場合は建築家アドルフ・デルヴォー⁴⁴⁾ (Adolph DERVAUX: 1871-1945) と建築家・考古学者モーリス・ピッレ⁴⁵⁾ (Maurice PILLET: 1881-1964)、「e」極東」の場合、デルヴォーと建築家・都市計画家エルネスト・エブラール⁴⁶⁾ (Ernest HÉBRARD: 1875-1933) が務めたように、「b」中央アフリカ・マダガスカル」を除く 4 地域に総督らとともに派遣された、各地域で実績のある代表的な建築家・都市計画家自らが具体的な報告を行い、実績と課題が示されたのである。このうち「a」北アフリカ」「d」東洋」「e」極東」に関する報告者は、いずれもミュゼ・ソシアルの都市・農村衛生部会に所属、もしくは報告を行った者で、当時の植民地政策に基づく仏領の都市計画はミュゼ・ソシアルの意向が反映される形で展開されたと考えてよい。

一方、「II. 美学の課題」はそれぞれ建築家ルネ・パトウイラル＝ドゥモリアス⁴⁷⁾ (René PATOUILLARD-DEMORIANE: 1867-1957) と著述家レアンドル・ヴァイラ⁴⁸⁾ (Léandre VAILLAT: 1878-1952)、「III. 居住」は建築家オーギュスタン・レイ⁴⁹⁾ (Augustin REY: 1864-1934) と建築家ジョゼフ・マラスト⁵⁰⁾ (Joseph MARRAST: 1881-1971)、「IV. 保健・衛生」は医師・微生物学者・エミール・マルショウ⁵¹⁾ (Émile MARCHOUX: 1862-1943)、「V. 都市と地方の法律」は法学者ウィリアム・ウアリ⁵²⁾ (William OUALID: 1880-1942) と行政官ガストン・モンサラ⁵³⁾ (Gaston MONSARRAT: 1864- 没年不詳)、「VI. 都市の具体案の実行性」は陸軍地理部長を務めた技師アンドレ・ベロ (André BELLOT: 1873-1942) に委ねられており、20 世紀前半の新たな都市計画ユルバニズムが、単に建築家が都市像を描く技芸にとどまることなく、法学や医学、文化、軍事という実に幅広い部門の専門家とともに共同で検討されたものであることを示唆している。ユルバニズムが技芸 (Art) というよりもむしろ科学 (Science) であるという何よりの証左である。

4. 報告書「植民地と熱帯国の都市計画」

国際植民地・熱帯諸国都市計画会議で主席書記官を務めたロイエは、「I. 植民都市と熱帯都市の開発」と「II. 美学の課題」、「III. 居住」から「VI. 都市の具体案の実行性」まで、すなわち事例と課題をそれぞれ各 1 巻に大別し、全 2 巻からなる報告書『植民地と熱帯諸国の都市計画⁵⁴⁾』を編纂した。本会議とその報告書の枠組みは、「II. 美学の課題」が報告書における「VI. 古代都市」という形で、全体の最後に付記されたという大きな相違点はあるものの、こうした名称と順序のうち一部に違いを除けば、報告書はほぼ変更されることなくまとめられた

といえる。このうち、フランス植民地が絶頂期を迎えた当時の概要を把握する上で最も重要なのが前者の実例にほかならない。

プロストは第一次大戦以前、すなわちコルニユデ法はもとより、仏領における都市に関する法律が十分に整備されていない時代に、自ら手がけたアントウェルペン都市圏改造設計競技 (1910) と同様に、モロッコで新市街の建設ばかりでなく、本国とほぼ同様の歴史的建造物の登録制度を導入し、旧市街のメディナ内外にかかわらず、イスラム都市というまったくの異文化圏における歴史遺産を保全し、リヨテがマダガスカルのアンカソベで手がけた都市計画の基本方針である歴史主義を貫いた。

こうした当時の方針は「II. 美学の課題」、つまり「VI. 古代都市」にも反映されており、エジプト、メソポタミア、小アジア、イスラエル、中央シリアを中心とする「古代オリエント」、ティムガッド、ドジェラミ、テベッサ、ランベズ (現・タズー)、シェルシェル、トレムセン、メダウルシュ、トブルシクム、カルタゴというアルジェリアの古代ローマ植民地を取り上げた「古代ローマ・アフリカ」、アンティーケ、アパメア、ビブロス、サイダ、トリポリ、スール、プトレマイオス、タルトゥースというシリアやキプロスにおける「中世フランク人の聖都や都市」に至るまで示されており、それらは単に入植した当時の新たな都市計画ばかりでなく、歴史都市の発掘や考察についても課題とされたのである。

実行委員会の副委員長にはベルギー、イギリス、オランダそれぞれの関係者が名を連ね、会議および報告書に関わった。ポルトガル領赤道アフリカのモザンビークの都市ベイラ、ベルギー領コンゴの 8 都市、1922 年 2 月 28 日に独立したエジプトの 4 都市、インドネシアほかのオランダ領インドに属する 6 都市、シンガポールからボンベイ (現・ムンバイ) までのイギリス領インドの 10 都市ほかのように、仏領以外の国々の領土における都市計画も取り上げられたが、これらのうち一部の都市を除くと、すべて仏領もしくは過去に仏領であった地域に該当する。さらにそのうちミュゼ・ソシアルの都市・農村衛生部会に所属、もしくは本部会で植民地の事業報告を行った建築家、都市計画家、造園家、測量士らによる都市計画が実施された地域を限定しても、こうした建築家たちが活躍した地域がいかにも広範にわたっていたかは明らかである。

「a」北アフリカ」の中で取り上げられたフランス領の都市は 14 都市のアルジェリア、1 都市のチュニジア、10 都市のモロッコであった。このうちプロストはモロッコ (1913-23) の後、チュニス (1927-30) とアルジェ

(1930-36)の両国で都市計画を手がけた。この国際会議の全6点の主題のうちの1つである「V. 都市と地方の法律」が取り上げられたばかりでなく、都市計画の法律に関する議論⁵⁵⁾が重視されたように、こうした仏領においてもコルニユデ法の有無が歴然としていた。事例はまさに、リヨテの下で更地に法律なしで描いたモロッコと、法の下で立案されたチュニスおよびアルジェにある。

フランスが支配を広げたアフリカは、マダガスカルを含む東アフリカと西アフリカ、赤道アフリカに大別され、これら3地域のうち「b) 中央アフリカ・マダガスカル」は、「a) 北アフリカ」の3カ国と同様に大部分が仏領になった。これらの地域における都市計画は従来の工兵や測量、土木に加わり、20世紀から建築家や都市計画家が加わるが、リヨテによるマダガスカル⁵⁶⁾の2都市のほか、新たな都市計画が実施された領土はほとんど見当たらない。

一方、フランス植民地史の中で最も長い歴史のある「c) アメリカ」の実例は、数多くの国々が仏領ギアナ、サン＝マルタン、サン＝バルテルミー、グアドループ、マルティニークほかを除くと、19世紀にはすでに独立していたため、カナダを除くカリブ海諸国および南米に限られるとともに、「a) 北アフリカ」や「b) 中央アフリカ・マダガスカル」とは異なり、総督の下で実施されたものではなく、20世紀初頭から設計競技の開催や設計者の招聘という形で次々に検討されたものであった。おそらく最初の一例はアンドレ・ベラル⁵⁶⁾(André BÉRARD: 1871-1948)が、設計競技で1等に出選されたエクアドル最大の都市グアヤキルに違いない。その後もフォレストイエがテオドル・ルヴオ(Théodore LEVEAU: 1896-1971)、ウジェーヌ・ボドゥアン(Eugène BEAUDOUIN: 1898-1983)とキューバのハバナ(1926-29)で、ダンジェ(René DANGER: 1872-1954, Raymond: 1883-1959)⁵⁷⁾父子がコルニユデ法に基づいてマルティニークのフォート＝ド＝フランス(1929-31)で、アガシュガリオデジャネイロ(1930)で、それぞれ都市計画を手がけたように、アフリカやアジアのいわゆる当時の仏領の都市計画とも異なり、それゆえ本会議における報告者もミュゼ・ソシアルの都市・農村衛生部会に所属する建築家でなく、アメリカで実績を上げたランベールが担当した⁵⁸⁾。とはいうものの、これらの都市計画は、いずれもが同部会に所属する建築家、都市計画家、造園家によるものであり、ユルバニズムの波及に、いかに同部会の建築家らが実にさまざまな形で取り組み、貢献したかを示す何よりの証なのである。

西がエジプトから、東はアフガニスタンまでの地域と

定められた「d) 東洋」は、「a) 北アフリカ」や「b) 中央アフリカ・マダガスカル」のように仏領のみならず、「c) アメリカ」と同様に設計競技の開催や設計者の招聘という形で次々に都市計画が検討されたばかりでなく、宗主国と従属国が時代毎、あるいは地域毎に入り組んでいるため極めて複雑である。そのうち、西の拠点、エドゥアール・アンパン男爵(Édouard EMPAIN: 1852-1929)に招聘されたアレクサンドル・マルセル⁵⁹⁾(Alexandre MARCEL: 1860-1928)によるカイロ近郊のヘリオポリス(1907-12)で、東の拠点はダンジェ父子によるシリアのベイルート(1931-32)とアレppo(1933)、ダマスカス(1936)に変わらない。ただし前者は東洋趣味に長けた建築家で、プロストと入れ替わる形で派遣されたが、ミュゼ・ソシアルの都市・農村衛生部会に所属も報告もしておらず、ユルバニズムを検討する場合にはダンジェ父子によるものの方がはるかに意義がある。

ユルバニズムは東洋の中心地の1つ、トルコにも波及した。オスマン帝国第34代皇帝アブデュルハミトII世(在位: 1876-1909)の招聘されたジョゼフ＝アントワヌ・ブヴァール⁶⁰⁾(Joseph-Antoine BOUVARD: 1840-1920)がコンスタンティノープル(現・イスタンブール)(1902)で提案したのは競馬場や大通り、広場、橋⁶¹⁾というそれぞれ個別の事業であり、建築でもなければ、いわゆるユルバニズムに値するような都市計画でもない。こちらはブヴァール自身、パリ市の重職にはあったものの、ミュゼ・ソシアルの都市・農村衛生部会には属していない者によるものであった。

一方のダンジェ父子はトルコ共和国初代大統領となるアタトゥルクから依頼されたイズミル大火後の都市復興(1926)をプロストの下で手掛けており、この地域におけるユルバニズムの波及に一役買う働きをして、シリア諸都市の事業展開につなげた実績がある。また、新首都アンカラ建設のために開催された設計競技⁶²⁾にはフランスからジョスリーが招聘されており、その後で開催された古都イスタンブールの都市開発に関する設計競技⁶³⁾(1934)にはアガシュとランベールが招かれ、それぞれドイツ人の建築家や都市計画家と近代都市の将来像を競いあった。

インドシナからニューカレドニアまでの非常に幅の広い「e) 極東」で中心的な役割を果たしたのは、北はハノイから南はホーチミンまでの6都市を手がけたエブラールであった。インドシナ総督のモーリス・ロン(Maurice LONG: 1866-1923)は、モロッコ初代総督のリヨテとプロストの関係と、二人が構築した建築・都市

の中心地をハノイに築き上げるために、1921年に元インドシナ総督で首相を務めたアルベール・サロー (Albert SARRAULT: 1872-1962、在位 1933, 1936) に建築家・都市計画家の派遣を依頼したことにはじまる。

これらの都市のうち、プノンペンを例に取り上げると、総督の下で測量士と都市計画家が描いた図の違いは明らかである。前者による計画案は格子状に街区が形成されたものであるのに対して、後者による案には居住地、商業地、公共施設、遊園地、病院および大学ほかのための土地というそれぞれに用途が明確に割り当てられたばかりでなく、これらの大小に分割された街区が放射状道路や円形交差点、広場をとめない形作られており、両者は明らかに異なる。こうした点で 20 世紀の新たな都市計画であるユルバニズムが大きな役割を果たしており、その導入でミュゼ・ソシアルの都市・農村衛生部に所属するエブラールがギリシャのテッサロニキ大火後の復興都市計画を手がけた後で、東南アジアを中心に尽力したことは明白である。

結

世紀の転換期は、アメリカのダニエル・H・バーナム (Daniel H. BURNHAM: 1846-1912) が手掛けたフィリピンのマニラ (1905)、イギリスのエドウィン・ラッチェンス (Edwin LUTYENS: 1869-1944) によるインドのニュー・デリー (1912-30)、オドアルド・カヴァニャーリ (Odoardo CAVAGNARI: 1868-1920) が着手したエトルリアのアスマラ (1913) のように、欧米の強国が東南アジアやインド、アフリカに領土を拡大し、建築家たちがより広大な地域に新たな都市を描く試みを次々に展開しはじめた時代で、フランスは、総督リヨテの下で活躍したプロストを筆頭に、ミュゼ・ソシアルの都市・農村衛生部に所属する建築家たちが中心になり、国内ばかりでなく自国の植民地をはじめとして、世界各地で次々に都市計画を手がけることにより、科学に基づいた 20 世紀の新たな都市計画、ユルバニズムの波及に大きな役割を果たしたのである。

その萌芽の一端は、急進派の政治家で首相を 2 度務めた実績のあるサローが「メトロポリスの安泰は植民地にある⁶⁴⁾」というように、フランス語圏ブラックアフリカを例に見れば、20 世紀初頭のパリのみならず 18 世紀から 20 世紀にかけての仏領にあることは明らかである。またフランス植民地帝国全盛期に開催された国際会議とその報告書が示す植民地および熱帯諸国の都市計画の全容と照合すると、リヨテによるマダガスカル⁶⁵⁾の 2 都市、アンカソベとフィアナランツォアにおける都市開発が先

例であることも否めない。近代主義と歴史主義の都市計画に、分離政策に対応した具体策と高度なゾーニング法を組み合わせることによってはじめて描かれた計画案がプロストによるモロッコ 15 都市の都市計画であり、その後、ミュゼ・ソシアルの建築家、造園家、測量士、すなわちプロスト、ダンジェ父子、エブラール、フォレストィエがそれぞれアフリカ、東洋、極東、アメリカに派遣あるいは招聘され、20 世紀の新たな都市計画、ユルバニズムが世界中に波及する一翼を担ったのである。

このうち東洋、つまり西アジアにはプロスト、ジョスリー、アガシュ、ランベールに加えてダンジェ父子という、ミュゼ・ソシアルの都市・農村衛生部に所属し、いずれもが中心的な役割を果たした建築家ばかりでなく測量士たちが集まっており、カイロ近傍のヘリオポリスの後、イズミル、イスタンブール、アンカラ、ベイルート、ダマスカス、アレppoで次々に都市計画を手がけたのである。これらの事業は仏領における総督の下で実施されたものと、統治者が開催した設計競技あるいは設計依頼という形で実施されたものが混在しており、さらにヘリオポリスを除くすべての事業が第一次大戦後に実施されたものであることを鑑みると、ミュゼ・ソシアルにおいて 20 世紀の新たな都市計画、ユルバニズムが検討され、ユルバニズム法が制定された後に実施されたものという点においても、こうした地域はこの東洋、つまり西アジア以外に見当たらない異例であるといえる。

図版出典

図 1 : POINSOT (Jacqueline), SINOUE (Alain), STERNADEL (Jaroslav), op.cit., 24), p.43. 図 2 : Ibid., p.45. 図 3 : Ibid., p.121. 図 4 : Ibid., p.127. 図 5 : ROYER (Jean), LYAUTEY (Hubert), DU VIVIER DE STREEL (Edmond), PROST (Henri), op.cit., 38), p.120. 図 6 : Ibid., p.121. 図 7 : Ibid., p.122. 図 8 : Ibid., p.115.

謝辞

本稿は次の研究助成に基づいた研究成果の一部である。平成 31 年度科学研究費補助金・新学術領域研究 (研究領域提案型)「西アジア及び周辺都市に尽力したフランスの都市計画家ユルバニストに関する研究」。

註

1) 19 世紀後半のパリでは、富の生産よりその従事者に注目した社会経済学派が台頭した。フレデリック・ル・プレー (Pierre Guillaume Frédéric LE PLAY: 1806-82) は理工科学校と鉱山学校に学び、技師の後、社会学者、

経済学者、政治家として社会改良に努め、1867年パリ万国博覧会ではじめて社会経済学部門を設けた。こうした知識人が国の関与を避けるために、本部門の復活した1889年パリ万国博覧会を機に、1894年にシグフリード・レオン・セイ (Léon SAY: 1826-1896)、エミール・シェイソン (Émile CHEYSSON: 1836-1910) が企画し、アルドバール・ド・シャンブラン伯 (Joseph Dominique ALDEBERT DE CHAMBRUN: 1821-99) の出資に基づいて、1895年にミュゼ・ソシアルを創設し、経済学者シャルル・ジド (Charles GIDE: 1847-1932)、土木技師エドゥアール・グリユナー (Édouard GRUNER: 1849-1933)、内務大臣を務めた政治家アンリ・モノ (Henri MONOD: 1843-1911)、社会主義の政治家ピエール＝ポール・ギエース (Pierre-Paul GUIEYSSE: 1841-1914) が加わり、農業、労働問題、社会保険、福祉事業、法律、対外関係に関する議論および調査が開始された。

2) Anonyme, *Le Musée social, Annales: revue mensuelle*, Paris, no.2, février 1908, pp.56-61.

3) Loi du 30 novembre 1894 dite Siegfried relative aux "Habitation à Bon Marché".

4) ボニエはパリ国立美術学校でモワイヨとアンドレに学び、ルエル通りの学校施設 (1912年) やビュット＝オ＝カイユの水泳プール (1930) などアール・ヌーヴオー様式の建築を残すとともに、パリ市主任建築管理官、セーヌ県建築・美観部門総監督官などの重職を歴任し、エナールとパリ市内の建築規制に関する関連法案 (1902)、パリ城壁跡地再開発に関する法案に基づく計画 (1919) など、パリ市の建築行政を牽引した。アール・デコ博の開催に尽力し、シャルル・ブリュメ (Charles PLUMET: 1861-1928) と会場計画を手がけた。

5) プロストはパリ国立美術学校でマルセル・ランベールに学び、ローマ賞 (1902) 受賞後、ハギア・ソフィア大聖堂修復案 (1904)、アントウェルペン都市改造設計競技 (1910) で1等を獲得、在日本国フランス大使館案 (1911-12) をマルセルに委ね、モロッコ15都市 (1914-23)、ヴァール県コート・ダジュール (1922-39)、イズミル (1926)、モン＝ドール (1926)、サン＝ディエ (1927)、チュニス (1927-30)、メス (1928-31)、パリ地域圏 (1928-34)、アルジェ (1930-36)、イスタンブール (1936-51)、ブルサ (1938-44) で都市計画を手がけた。

6) Anonyme, *Le Musée Social, Fondation de Chambrun*, Paris: Arthur Rousseau Éditeur, 1911.

7) リスラーは20世紀前半に社会改良に尽力した実業家で、ミュゼ・ソシアル総裁として社会住宅、ガーデン・

シティーを導入、モロッコで成果を上げたプロストを信頼した。Anonyme, *Le Musée social, Annales: revue mensuelle*, Paris, no.1, janvier 1922, p.19.

8) Loi du 14 mars 1919 concernant les plans d'extension et d'aménagement des villes.

9) Loi du 19 Juillet 1924 modifiant et complétant la loi du 14 Mars 1919 sur les plans d'aménagement, d'embellissement et d'extension des villes.

10) 拙論「ミュゼ・ソシアルとユルバニスム」『日本建築学会大会学術講演梗概集 DVD 建築歴史・意匠』東京：日本建築学会、2019年9月、515-516頁。

11) AGERON (Charles-Robert), *Politiques coloniales au Maghreb*, Paris: PUF, 1972. ———, *Histoire de la France coloniale*, Paris: Armand Colin, 1990. ———, *L'Afrique noire française, l'heure des indépendances*, Paris: CNRS, 2010.

12) 平野千果子『フランス植民地主義の歴史—奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』人文書院、2002年。———、『フランス植民地主義と歴史認識』岩波書店、2014年。

13) WRIGHT (Gwendolyn), *The Politics of Design in French Colonial Urbanism*, University of Chicago Press, 1991.

14) RABINOW (Paul), *French Modern, Norms and Forms of the Social Environment*, University of Chicago Press, 1995.

15) BERDOULAY (Vincent), CLAVAL (Paul), *Aux débuts de l'urbanisme français*, Paris: L'Harmattan, 2001. BERDOULAY (Vincent), SOUBEYRAN (Olivier), *L'Écologie urbaine et l'urbanisme, aux fondements des enjeux actuels*, Paris: La Découverte, 2002.

16) PINOL (Jean-Luc), *Atlas historique des villes de France*, Paris: Hachette, 1996. ———, *Histoire de l'europe urbaine*, vol. I et II, Paris: Seuil, 2003.

17) 布野修司『近代世界システムと植民都市』京都大学学術出版会、2005年。

18) 松原康介『モロッコの歴史都市 フェスの保全と近代化』学芸出版社、2008年。

19) セルダはスペイン・カタルーニャで、バルセロナ整備拡張計画 (1855) を手がけ、ラテン語圏における都市計画の原語「ウルバニザシオン」を提唱した著作を残した。CERDÁ (Ildefonso), *Teoría General de la Urbanización, y aplicación de sus principios y doctrinas a la reforma y ensanche de Barcelona*, Madrid: Imprenta

Española, 1867.

20) ジョスリーはパリ国立美術学校でドームとエスキエに建築を学び、都市計画の設計競技でバルセロナ (1905) で 1 等、ベルリン (1910) で 2 等、パリ (1919) で 1 等に出選され、モン＝ドール (1919-25) トゥルーズ (1920-32)、グルノーブル (1921-27)、タルブ (1923-27) ヴィッテル (1923-28)、カルカッソヌ (1924-34)、ポー (1925-33) ほかの地方都市で都市計画を手がけ、目的別地域区分法の先駆となる。トルコ共和国新首都アンカラ都市計画設計競技 (1927) に招聘され、2 等に出選された。グルノーブル水力発電・観光国際博覧会 (1925) で主任建築家を務めて、会場計画を手がけた。

21) エナールはパリ中央工芸学校の後、父の跡を継ぎ、パリ市建築家として交通問題と都市計画に取り組み、円形交差点、広場、公園などの新たな道路計画を提案、その成果を建築、土木、技術誌に寄稿し、著作にまとめた。1889 年パリ万国博覧会から尽力し、1900 年パリ万国博覧会、1911 年トリノ博覧会で受賞。ロンドン都市計画会議 (1910)、ベルリン都市計画展 (1910)、デュッセルドルフ都市計画展 (1912) に都市計画家として参画。初代フランス建築家・都市計画家協会会長として都市・農村衛生部会を牽引した。HÉNARD (Eugène), *Études sur les transformations de Paris*, 8 vols, Paris: Réunis, 1903-1909.

22) フォレストイエはパリ理工科学校、パリ自由政治科学学院に学び、パリ市に従事して、ヴァンセーヌの森、ブローニュの森、シャン＝ド＝マルスの維持・管理・整備の後、モロッコ、スペイン、キューバ、アルゼンチン、ポルトガルほかで博覧会会場、公園、庭園のほか、プエノスアイレス (1923)、ハバナ (1926-27)、リスボン (1927) で都市計画を手がけた。公園における並木道と散歩道を連結した公園システムに関する検討や都市圏という縮尺で美化の新たなシステムを提案し、著作を残した。FORESTIER (Jean-Claude-Nicolas), *Grandes villes et systèmes de parcs*, [s.l.][s.n.], 1906.

23) LORTIE (André), COHEN (Jean-Louis), *Des fortifs au périf: Paris, les seuils de la ville*, Paris: Picard, 1991, pp. 79-112.

24) Ministère de l'urbanisme et du logement-Mission de la recherche urbanine, *Urbanisme et habitat en Afrique noire francophone avant 1960, Inventaire de l'expérience française sur les problèmes d'aménagement, d'habitat, de techniques du bâtiment dans les pays en voie de développement avant 1960*, Paris: Coopération et aménagement, agence française pour l'aménagement

et le développement à l'étranger, 1984. 次の著作は本報告書に基づいて出版されたものである。POINSOT (Jacqueline), SINOUE (Alain), STERNADEL (Jaroslav), *Les Villes d'Afrique noire, politiques et opérations d'urbanisme et d'habitat entre 1650 et 1960*, Paris: Ministère de la coopération et du développement: la Documentation française, 1989.

25) リョテはサン＝シール陸軍士官学校の後、インドシナ (1894-97)、マダガスカル (1897)、モロッコ (1912-16, 17-25) で反抗勢力を鎮圧する一方、行政、衛生、教育を手がけるとともに道路、港湾、都市を建設し、諸部族の上層部の支持を得る制圧・弾圧と利益の誘導を組み合わせた怀柔で治績を上げ、第一次大戦中に陸軍大臣 (1916-17) を務め、植民地経営に関する著作を残した。

26) 拙論「14 都市における新市街の計画案に関する考察—モロッコにおけるアンリ・プロストの都市計画とアール・デコの建築 その 3—」『日本建築学会大会学術講演梗概集 DVD 建築歴史・意匠』日本建築学会、2014 年 9 月、257-258 頁。

27) 拙論「アンリ・プロストによるヴァール県コート・ダジュールの保護・開発計画案」『日本建築学会大会学術講演梗概集 DVD 建築歴史・意匠』日本建築学会、2015 年 9 月、539-540 頁。

28) 拙著「イズミル〈トルコ〉分断の解決か、都市の保全か、大火後の都市再生」『地中海を旅する 62 章』東京：明石書店、2019 年、34-37 頁。

29) 拙論「アンリ・プロストによるイスタンブールの都市計画に関する概説」『日本建築学会近畿支部研究報告集 計画系』第 54 号、日本建築学会、2014 年、885-888 頁。

30) パトリシア・A・モルトン著、長谷川章訳『パリ植民地博覧会—オリエンタリズムの欲望と表象—』東京：ブリュッケ、2002 年、9-21 頁。

31) Service d'architecture et plans des villes du Maroc _ Rabat, *Plans directeurs des villes du Maroc*, [s.l.], avril 1922.

32) GOISSAUD (Antony), “L'Exposition coloniale”, *La Construction moderne*, Paris, 4 mai 1930, pp.470-480.

33) LAPRADE (Albert), *Lyautey, urbaniste, souvenirs d'un Témoin*, Paris: Horizons de France, 1934. CROIDYS (Pierre de), *Lyautey, bâtisseur d'empire*, Paris: Éditions des loisirs, 1943.

34) Le Général VACHER, “Lyautey urbaniste”, dans Jean ROYER (dir.), *L'urbanisme aux colonies et dans les pays tropicaux*, Paris: Éditions d'urbanisme, 1932,

pp. 115-125.

35) Ibid.

36) ロイエは建築専門学校 (Ecole spéciale d'architecture)、都市高等研究所 (Ecole des hautes études urbaines) に学び、パリ地域圏計画で 15 年間プロストと協働した後、戦災復興・都市計画省主席都市計画家を務め、ボルドー、リエージュ、ブール＝ガン＝ブレス、アルジェリアのブギ、ジヴォール、リブルヌ、オルレアン、オヨナ、ウィストレーム、サン＝テミリオン、リヨンで都市計画を手がけた。雑誌「都市計画 Urbanisme」の創刊者。

37) 国際植民地・熱帯諸国都市計画会議は大統領ポール・ドゥメール (Paul DOUMER: 在位 1931-32)、前大統領ガストン・ドゥメルグ (Gaston DOUMERGUE: 在位 1924-31)、その次の大統領となる上院議会議長アルベール・ルブラン (Albert LEBRUN: 在位 1931-32) らの政治家を筆頭に、ミュゼ・ソシアル総裁、フランス都市計画家協会名誉会長のリスラーら総勢 29 名からなる主催委員会の下で開催された。実行委員会は、元帥リヨテが名誉委員長、國務院長官ミシェル・タルディ (Michel TARDIT: 1859-1937) が名誉副委員長、プロストが委員長、本博覧会におけるベルギー、イギリス、オランダ各国の委員長および経済委員会副委員長ダニエル・セリリュイ (Daniel SERRUYS: 1875-1950) が副委員長、ロイエが主席書記官を務め、デルヴォー、エブラール、ラプラド、マラスト、ピッレらの建築家と著述家、医師、大使、元総督、元大臣らの委員、総勢 26 名で組織された。

38) ROYER (Jean), LYAUTEY (Hubert), DU VIVIER DE STREEL (Edmond), PROST (Henri), *L'Urbanisme aux colonies et dans les pays tropicaux*, tome I^{er}, La Charité-sur-Loire: Delaunay, 1932, p.21-22.

39) Anonyme, "L'Urbanisme aux colonies et dans les pays tropicaux", *Urbanisme*, Paris, mai 1932, pp.VI-VII.

40) 海外領土ニューカレドニアはオセアニアであるが、本会議における世界の地域区分、全 5 地域の分類の中では「e」極東に割り当てられている。

41) オリヴィエは 1918 年にスーダン副総督、1924 年にマダガスカル総督を歴任、フランスの植民地に関する著作を残し、1931 年パリ植民地国際博覧会の公式記録を編纂した。OLIVIER (Marcel), *La France et le problème colonial*, Paris: Centre d'informations documentaires, 1938. Ministère des colonies, *Rapport général, Exposition coloniale internationale de 1931*, Tomes I-VII, Paris: Imprimerie Nationale, 1933-34.

42) タルドはリヨテや保護領モロッコ、ユルバニズムに関する著作を残した。TARDE (Guillaume de),

"L'Urbanisme, Œuvre de Réalisation", *Urbanisme*, Paris, no.2, mai 1932, pp.42-44. ———, *Lyautey: le chef en action*, Paris: Gallimard, 1959. ———, *Protectorat de la République française au Maroc. L'Action économique du Protectorat*, Rabat: Imprimerie du Bulletin officiel du Protectorat, [s. d.]

43) ランベールはパリ国立美術学校でマルセル・ランベールに学び、ニューヨーク、シカゴ、ワシントン (1922-29) をはじめ、バーナムとシカゴ計画を手がけ、ゾーニング法の先駆者となる建築家・都市計画家エドワード・H・ベネット (Edward H. BENNETT: 1874-1954) と協働でメキシコ (1925)、チリとアルゼンチン (1929-30)、ギリシャとエジプト、中東 (1931)、その後オランダ、スカンディナヴィア、ドイツ、チェコスロバキア、スイスで都市計画に尽力し、パリ地域圏計画 (1932-35) で西側の検討に参画、さらにイスタンブール (1933)、ロティヴァルと協働でカラカス (1937-39) を検討し、トルコのサムスンやコンヤ、エスキシェヒル (1940-41) ほか、その後リヨン (1939-41)、ノール県、パ＝ド＝カレ県、インドル＝エ＝ロワール県 (1941-43) で都市計画を顧問した。アール・デコ博で庭園建築家を務めた。

44) デルヴォーはパリ国立美術学校でモワイヨらに学び、ビアリッツ (1911) とルーアン (1928) で駅舎を、セテ商事裁判所 (1929)、赤道ギニアの上院議会と裁判所を残し、トゥーロン (1923)、エクス＝レ＝テルム (同)、ペルピニャン (1925)、バンドルで都市計画を手がけた。アール・デコ博で 20 棟からなるフランス村をまとめた地域主義者で、フランス都市計画家協会会長を務めた。

45) ピッレはパリ国立美術学校でシフロらに学び、上エジプト、カルナックの発掘と修復 (1911-12)、パレスティナ、シリア、トルコを経由し、1902 年に「ハンムラビ法典碑」を発掘した考古学者ジャック・ド・モルガン (Jacques de MORGAN: 1857-1924) とスサに従事 (1912-13)、インドの後、マラケシュで宮殿、邸宅、モスクの修復 (1916-17)、シリア、パレスティナ、キリキアで考古学、カルナックで発掘と修復 (1920-25)、シリア (1926)、ビブロス、トルトサ、クラック・デ・シュヴァリエ (1927-31)、エジプトで考古学 (1933、35、37、39、51)、中エジプトのダラで発掘調査 (1948) に従事した。

46) エブラールはパリ国立美術学校でジナンらに学び、ワシントン大学 (1900) に留学、ローマ賞 (1904) を受賞、スパラトのディオクレティアヌス宮殿修復案 (1910)、古代ローマの歴史家ジャック・ザイラー (Jacques

ZEILLER: 1878-1962) と著作を出版、平和主義者ポール・オトレ (Paul OTLET: 1868-1944)、画家ヘンドリック・クリスティアン・アンデルセン (Hendrick Christian ANDERSEN: 1872-1940) とユートピア「ワールド・シティー World City」を発表。大火後のテッサロニキ (1917-21)、アテネ、マケドニアの後、ハノイ (1924)、サイゴン、トンキン、ハイフォン、プノンペン、ナム・ディン、ダラトで都市計画を手がけた。HÉBRARD (Ernest), ZEILLER (Jacques), *Spalato, Le Palais de Dioclétien*, Paris, 1911. HÉBRARD (Ernest), ANDERSEN (Hendrik Christian), *Création d'un mondial de communication*, New York, 1912.

47) パトゥイラル＝ドゥモリアヌはパリ国立美術学校でジナンに学び、フェルディナン・デュテール (Ferdinand DUTERT: 1845-1906) の下で自然史博物館で研鑽を積み、ローマ賞 (1895) を受賞後、アントニヌス・ピウス帝時代のティベリーナ島の復元、ナンシー国立美術学校設計競技 (1906)、ジュネーヴのパレ・デ・ナシオン設計競技 (1926) ほか多数受賞、インドシナ銀行 (1925) や国立農業研究所 (1928)、パリ 5 区市庁舎 (1930) ほかを手がけて、アルデンヌ、モントワ、セッション、ブコンヴィルで戦災復興を担当した。1900 年よりフランス芸術家サロンで古代建築、イタリア・ルネサンス、ローマのヴィラ・メディチ、フィレンツェのバルジェロ宮の中庭を研究し、ローマ、シチリア、ギリシャの古代記念碑を復元。テイラー財団建築家 (1902)、同財団名誉総裁 (1954)。

48) ヴァイラは美術評論、舞踏に精通し、ミュゼ・ソシアルが関与した事業、保護領モロッコ、ランスの田園住宅「緑道」、パリ地域圏計画、住居に関する著作を残した。VAILLAT (Léandre), *La Maison des pays de France*, Paris: Flammarion, [s.d.] ———, *Le Sourire de l'ange*, Paris: Flammarion, 1929. ———, *Le Visage français du Maroc*, Paris: Horizons de France, 1931. ———, *Seine, chef-lieu Paris*, Paris: Arts et métiers graphiques, 1937.

49) レイはパリ国立装飾美術学校でトランとアンドレに学び、ロチルド財団設計競技 (1905) ほかで多数受賞、アルジャントゥイユ、ル・ピュイ、ベルシー、フォンテーヌブロー、ラン、トリノほかで数多くのプロテスタント寺院と同財団の労働者住宅を手がけ、同財団で衛生、居住、都市計画に関する研究に従事した。REY (A. Augustin), *Le Cri de la France, des logements! la gravité de la crise, les grands remèdes*, Paris: Rivière, 1912. REY (A. Augustin), PIDOUX (Justin), *La Science des plans de villes, Ses applications à la construction*,

à l'extension, à l'hygiène et à la beauté des villes, Orientation solaire des habitations, Paris: Dunod, 1928.

50) マラストはパリ国立美術学校でジュリアンとランベールに学び、プロストの下でモロッコのフランス広場 (1920)、裁判所 (1923)、市庁舎 (1923) などの公共施設を手がけ、帰国後、ヴァンセンヌのサン＝ルイ教会堂 (1924)、国立商業・産業銀行 (1928) を残し、第二次大戦後、ノルマンディー地方都市復興主任調査官を務め、シテ島とサン＝ルイ島の再建に尽力した。

51) マルショーは腸チフスに関する研究に、ダホメ王国とインドシナ (1888-1893) で医療に、セネガルのサン＝ルイで微生物学に、ブラジルの後、パストゥール研究所で熱帯微生物学に従事し、熱帯病理学会 (1908) を創設し、国際ハンセン病学会会長 (1923) に就任した。

52) ウアリはアルジェで法学を学び、ディジョン、ストラスブール、パリの大学で教授を務めた法学者。専門は人権、特に植民地における人権、移民、労働に関する連盟、会議、雑誌に参画し、パリ都市研究所 (Institute d'urbanisme de Paris) 所長 (1937-40) を務めた。

53) モンサラはプロストと同時代に内務省局長を務め、都市計画に関する数多くの著作を残した。PROST (Henri), MONSARRAT (Gaston), *L'Urbanisme*, Paris: S. A. P. E., 1927. MONSARRAT (Gaston), *Le Code de l'urbanisme, Recueil annoté des lois, décrets, règlements, circulaires et instructions ministérielles concernant l'aménagement, l'embellissement et l'extension des villes*, Paris: Publications administratives et Bibliothèque municipale et rurale, 1933-1938.

54) ROYER (Jean), LYAUTEY (Hubert), DU VIVIER DE STREEL (Edmond), PROST (Henri), op.cit. 38).

———, *L'Urbanisme aux colonies et dans les pays tropicaux*, tome II, Paris: Les éditions d'urbanisme, 1935.

55) TARDE (Guillaume de), “L'Urbanisme en afrique du nord, Rapport général”, *L'Urbanisme aux colonies et dans les pays tropicaux*, tome I^{er}, La Charité-sur-Loire: Delayance, 1932, pp.27-31.

56) ベラルールは父親の後、パリ国立美術学校でブロンデルらに学び、カルヴァドスの教会堂の修復、スタンやサン＝マンデ、ロマンヴィルに教育施設のほか、住宅、邸館、集合住宅、パリ 7 区の S.A.D.G. 本部 (1933) を手がけた。

57) ルネ・ダンジェは 1919 年に建築家の息子ポール (Paul DANGER: 1900-65) らと測量事務所を設立し、イズミル (1926)、オラン (1930-36)、ゲルマ (1931-32)、ベイルート (1931-32)、トリポリ (1931-36)、アルジェ

(1931-37)、ボーヌ (現・アンナバーバ) (1932)、アレップ (1933)、ダマスカス (1936)、コンスタンティヌス (1938-40) で、国内ではビダール (1926)、トノン (1927)、トロワ (1927)、ベルジュラク (1929)、ロミイ (1930)、サント＝サヴィーヌ (1932)、ペリグー (1933-35)、カン (1935)、ロワイアン (1937-38)、ニーム (1939)、マントン (1939)、ロデズ (1943-44) で都市計画を手がけ、土木専門学校で教鞭を取り、その講義録を著作に残した。Danger (René), *Cours d'urbanisme*, Paris: Eyrolles, 1933.

58) ジャック・グレベール (Jacques GRÉBER: 1882-1962) はフィラデルフィアのパークウェー (1918-32)、ミズーリー州のセント・ジョゼフ (1931)、カリフォルニアのパロス・ベルデス、その後にケベック (1942)、オタワ (1950)、モントリオール (1952-53) で都市計画を手がけたが、本会議およびその報告書の主題が植民地および熱帯国であるため、これらのグレベールによるアメリカ及びカナダに関する記載はない。

59) マルセルはミシェル・ルー＝スピッツ (Michel ROUX-SPITZ: 1888-1957) の義父で、パリ国立美術学校でアンドレに学び、ブカレストで上院議会議事堂 (1890) や中央駅舎 (1894) の設計競技や、デン・ハーグ平和宮設計競技 (1906) ほか受賞多数、フィラデルフィアでTスクエア・クラブ (1898-99)、シャテル＝ギオンの温泉施設、パリ7区のボン・マルシェ百貨店の東洋趣味のパーゴラ (1897)、アンジェヴィル城の修復、ラエケン城の改修 (1902-07)、オーストエンドの競馬場、ラ・クーロンヌの領地と城郭の改修、インドのカプール

タラーのマハラジャ宮殿、ヘリオポリスでビザンティン様式の大聖堂と男爵邸「ヒンドゥー」 (1910)、セント＝ルイス万国博覧会日本館 (1904)、ガン万国・国際博覧会日本館 (1913)、プロスト案を引き継ぎ在日本国フランス大使館案 (1913) を残した。

60) ブヴァールはパリ国立美術学校でコンスタン＝デュフーに学び、パリ市建築部門に務め、市内の公共建築を手がけるとともに、ガブリエル・ダヴィウーやアドルフ・アルファンと協働し、パリ万国博覧会産業宮のドーム (1889) や会場計画 (1900) のほか、パリ (1878, 1889)、シカゴ (1891)、アントワープ (1893)、メルボルン (1894)、ブリュッセル (1897)、セント＝ルイス (1904) の万国博覧会でパリ市館を、ブリュッセル (1903)、ブエノスアイレス (1907, 1909)、ロサリオ (1910-11)、モンテヴィデオ (1911)、ブラジルのサン・パウロ (1911) で都市計画を手がけた。

61) ZEYNEP (Çelik), “The Grand Schemes”, *The Impact of Westernization of Istanbul's Urban Form, 1838-1908*, Ph. D. dissertation, University of California, Berkeley, 1984, pp.223-247.

62) ドイツからヘルマン・ヤンセン (Hermann JANSEN: 1869-1945) とジョゼフ・ブリックス (Joseph BRIX: 1859-1943) が招聘された。

63) ドイツからヘルマン・エルグーツ (Hermann EHLGÖETZ dit ELGÖTZ: 1880-1943) が招聘された。アタトゥルクは設計競技の後、イスタンブールの事業をプロストに委ねた。

64) TARDE (Guillaume de), op.cit., 55), pp.27-31.

(令和元年12月3日受付)